

Editor's eye

・特集・

リンパ浮腫を巡って

編集担当 山本 俊幸

後天性の慢性リンパ浮腫は対処法に困る疾患である。読者の先生方はどのように対処しているだろうか？ 皮膚科単独ではむずかしいが、血管外科の中でもリンパ管を専門にしている医師は少ない。フットケア外来、リンパ浮腫外来などを設けている施設では専門外来へ廻せるが、そのような所は多くないだろう。また、診察する側もリンパ管の異常による疾患を見慣れないせいか、硬化性脂肪織炎をリンパ管炎と誤診しているケースをしばしばみかける。

本号では、リンパ外科の立場からリンパ浮腫の診断、検査法、最新の治療法について「総説1」で解説していただいた。下肢リンパ浮腫の患者さんをみたときにどのような手順で検査を進めていくか、大いに参考になると思われる。治療に関しては外科的な治療をしている先生が身近にいるかどうか大きな問題になる。実際に患者さんに一番長く接していると思われるリハビリテーションの立場からは、繰り返す蜂窩織炎や潰瘍をきたすさまざまな要因について「研究」で解説いただいた。足白癬が直接リンパ浮腫の原因になることはないが、逆に象皮症のような顕著なリンパ浮腫になると患者自身でのフットケアが疎かになり足白癬を合併することはしばしばある。また、リンパ浮腫を背景として二次的に生じる多彩な疾患についても「総説2」で触れてある。外傷や打撲などを受けた皮膚が外見上治癒したようにみえても、そこはvulnerable areaとしてその後ほかの皮膚病変を生じやすいことは知られているが、慢性のリンパ浮腫上にほかの疾患が生じる機序も同じように考えられている。

「臨床例」では、リンパ浮腫以外にもう少し広い視点での症例も含んである。硬化性脂肪織炎の診断は容易だがその原因や治療はむずかしい。高血圧症について確認する必要があることを認識させられる。治療に関しては圧迫療法が選択されることが多いが、ほかに超音波療法が有効と何十年も前に報告されて以降、進展がないのは残念である。ムチン沈着症との鑑別が困難な症例も提示されており、ご意見があればぜひ「声」の欄にお願いしたい。皮膚筋炎で体幹や四肢の浮腫はその後水疱形成に至ることがある。そのような症例はbullous dermatomyositisとも呼ばれアジア人に多く、内臓悪性腫瘍との関連が高いことは以前から知られている。提示症例では水疱形成までは至っておらず、治療によって浮腫も軽快している。Angioedema with eosinophiliaと好酸球性筋膜炎の症例はどちらも両下肢に浮腫性腫脹と末梢血好酸球増多がみられ、好酸球性筋膜炎のほうはMRIで筋膜肥厚がみられた。対比して読むとよいと思う。ほかにも、炎症性疾患(アトピー性皮膚炎、肉芽腫性眼瞼炎)、悪性腫瘍(外陰部Paget病、悪性リンパ腫、血管肉腫、転移性皮膚腫瘍)、疥癬など多彩な症例を執筆いただいた。日常診療でリンパ浮腫をみかけた際の参考にさせていただきたい。